

幼い頃、父に遊んでもらった記憶があまりない。私が産れた頃の日本はバブル景気の初め、父は朝から晩まで働きっぱなしだった。顔を見ない日がほとんどで、たまの休みにはいつも昼寝ばかりしていた。私は自然と母に懐いていった。それが理由なのか、今でも父が少し苦手である。怒鳴ったりする父ではないが、父の前では少し緊張する自分がいたからである。会話もお互いに探るようで、いつもぎこちないものだった。

昨年、父が定年を迎えることになった。私は定年祝いに焼酎グラスをプレゼントした。父が「大五郎」という焼酎を毎晩必ず飲んでいたのである。父はプレゼントしたグラスに焼酎を注ぎながら「お前も飲むか」と言って、自分がいつも使っていたグラスを差し出した。父の「大吾郎」を飲むのはこの時が初めてだった。飲み始めたのはいいが、やはり父と私の会話にはどこかぎこちなさが残っていた。

突然父が「将来何がしたいんだ」と尋ねてきた。「〇〇で働きたいと思っている」と伝えようと、「社会は厳しいからな」と父は言った。「家庭に仕事は持ち込まない」。それが信念だった父の初めてする仕事の話だった。父は自分の失敗や仕事への考え方を話してくれた。

私も自分の将来について真剣に話した。父は「そうか、そうか」としか相槌を打たなかったが、その顔はどこか嬉しそうだった。「がんばれよ」。最後に父はそう言って部屋から出て行った。私の前には父のグラスとプレゼントしたグラス、そして「大五郎」が残された。今まで苦手だと思っていた父との心の「間」が少し縮まった気がした。

焼酎を一口飲むと、氷が全部溶けて薄くなっていた。話をしている間、まったく飲まなかったらしい。「がんばれよ」。父の言葉を思い出し、私は一気に焼酎を飲み干した。

(728 文字)

〇〇の部分に志望業界を書く（記者、編集者、テレビ業界、webメディア etc）